

現地・対面信仰を のりこえろ！



大谷 文章

北海道大学触媒科学研究所

ほぼすべての学会やセミナー、発表会、討論会（以下「学会」）がオンラインのみでの開催となった。会告がでた時点で、だいたい半分くらいがオンラインのみ、のこり半分くらいが「場合によってはオンラインのみ」のハイブリッド開催を予定し、「しかたなく」オンライン。いずれの場合でも主催者や実行委員長の弁は、「現地で会えなくて残念。次回はぜひ現地開催で」となる。しかし、よく考えてみると、オンラインと現地開催のそれぞれのメリットとデメリットを考え、それらをもとに議論をつくした上で優劣をきめた¹形跡はないから、「現地開催がデフォルト」というのは一種の信仰である。

オンライン参加者のメリットのひとつは、時間と旅費（研究費）の節約である。筆者がウェブシステムでサポートしている10あまりの学会のうち、比較的小規模な学会の多くは、現地開催であったときより発表申込数、参加登録数ともにふやしたが、これはおそらくこのメリットのおかげである。このメリットが強調されることがないのは、開催形式をきめている世話人や実行委員、主催者あるいは主要な参加者が比較的潤沢な研究費をもっていて、自分をふくめて研究室のスタッフや学生、大学院生の旅費や参加登録費を支出できるからである。オンラインなら、旅費はいらないし、参加登録費もかぎりなくゼロにちかい。そのうえ、短時間の学内用務や授業があっても、その時間だけ離席すればよい。「研究経費が不足して現地開催の学会に学生を送りこめない」という場合でもオンラインなら問題ない。

にもかかわらず、「対面で議論するこ

と『こそ』が学会の意義である」という考えかたは根づよく、これが現地信仰の根拠となっている。ただし、この考え方はほかに選択肢がないことが前提である。オンラインという選択肢がでてきたときに、無条件に成立するのかが検証されたこともないから、やはり信仰である。信仰をひろめるには奇蹟が必要で、「あの学会である人と直接ディスカッションできたからこんな大きな発見がうまれた」とか「懇親会で類似の研究があることを指摘されて問題が解決した」とかとか。この手の奇蹟は、本人しか語れない「あとづけ」の成功体験である。おそらく、成功の真の理由は「他者の意見を受け入れる下地があったから」と「その意味をふかく考えたから」である。そのためのディスカッションは対面でなければならないのか。現地参加できなければ奇蹟は体験できないのか。

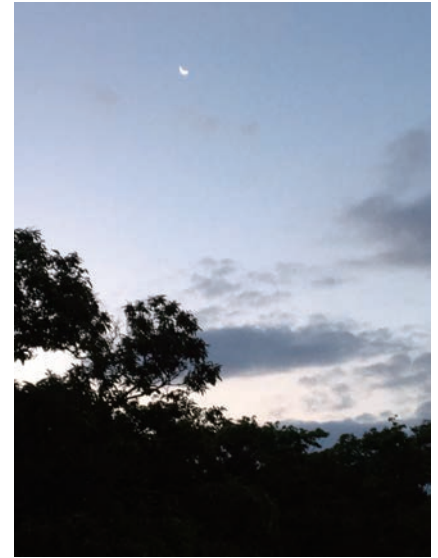
もうひとつだいたいオンライン学会のメリットは「かけもち可能」である。完全に日時がオーバーラップしていても、いくつでも同時に参加できる。現地開催だったら絶対にできないことである。ただし、このメリットを主催者が強調するのはむずかしいが、せまい領域の「うちの学会」ならともかく、ひろい範囲の、たとえば過去に参加したこともないような多様な参加者をえるためには、きわめて有効な戦略である²⁾。

さてここからが本題である。現地・対面信仰は個人の自由だから、酒を飲んでわいわいやりたいとか、せっかく行くんだから観光も温泉も楽しみたいとかの下心がすけていてもかまわない。しかし、口角泡を飛ばして大いに議論しているときや、肩をたたき合って懇親会で交歓を

ふかめているとき、泊まりこみセミナーで十分に議論をつくしたあとでいびきをかいているとき、そして、実行委員として会場のかたづけと懇親会の準備で走りまわっているときのことを考えてみよう。そのとき、こどもを保育園にむかえに行くのはだれですか、日常生活のための買い物に行くのはだれですか、親がいる介護施設からの緊急連絡でかけつけるのはだれですか。

コロナ禍のおかげで、オンラインにすれば参加の障壁がほとんどなくなることを、現地・対面信仰のないわたしたちは知ってしまった³⁾。子育て中であろうがなかろうが、旅費を捻出できようができませんが、飛行機にのりたかろうがのりたくなかろうが、国内にいようが海外にいようが、日本語表示しかない地方にはいきたくない留学生であろうがなかろうが、懇親会の地元料理をたのしみにしようがハラルじゃないから出席したくなかろうが、移動に車いすが必要であろうがなかろうが、すべての参加者にオンラインでの参加と発表、議論を保証することこそが学会がめざすべき方向ではなかろうか。そして、それがおなじように実行委員にも保証されるとするなら、ハイブリッド開催はないといっても言いすぎではなかろう。いまこそ、「なんの心配もなく現地参加できる『めぐまれた』」ひとだけが対面で発表、議論して成功体験をえる」のではなく、学会が、多様な会員に対して発表と議論の機会をきわめて公平に提供できるチャンスである。

1) 2つのオプションのそれぞれにメリットがあるから、組み合わせたハイブリッドがよいというのは論理的な



夏の国際会議出席中に自宅の窓から見た三日月

誤謬である。それぞれのメリットは、それぞれ単独でのメリットであって、組み合わせたときにもメリットになるという保証はなく、たいがいはデメリットに変化する。

- 2) 筆者はコロナ禍のおかげで、これまで参加を考えたこともないような学会やミーティングにオンライン出席することができ、多くの刺激をうけた。無料でこんな体験ができるなんてコロナ禍前には想像できなかった。
- 3) オンライン学会の終了後にアンケート調査すると、「やはり現地・対面がよかった」という意見がでて主催者は納得するようだが、「現地開催だと参加できないけど、オンラインだったので参加できてよかった」という意見があることが開催報告で紹介されたことがあったらどうか。